

02 幼児の近見視力について(その1) —近見視力の実態と視行動—

たかはし 高橋ひとみ¹⁾、かわばたひでひと 川端秀仁²⁾、えとう たかし 衛藤 隆³⁾

¹⁾ 桃山学院大学, ²⁾ かわばた眼科院長, ³⁾ 東京大学大学院教育学研究科

【目的】遠視系の近見視力不良は早期発見・早期管理が必要であるにもかかわらず、幼児の健康診断では遠見視力検査しか行われていない。スクリーニングとしての近見視力検査が可能となる年齢および近見視力不良の実態を把握することを目的として本研究を行った。

【方法】0 幼稚園で年長児(69人)を対象に「近見視力検査」と「視行動に関するアンケート調査」を実施した(2006年9月5日~30日)。アンケート調査項目は、幼児の日常生活において視覚情報入手に関連すると思われる11項目を用意し、保護者記入とした。近見視力検査は、養護教諭が「近距離単独視標」(半田屋商店製)を使用し、正確に眼前30cmの距離に視標を保つように検査場を設定して実施した。統計処理はSPSS(Ver.13)により χ^2 検定を行った。

【結果と考察】近見視力検査の結果、両眼とも「1.0未満」は9人(13.0%)、「1.0以上」は53人(76.8%)、片眼のみ「1.0未満」は7人(10.2%)であった。遠見視力との関連では、遠見視力が「1.0以上」で近見視力が「1.0未満」は、右眼の場合3眼(4.3%) 左眼の場合5眼(7.2%)であった。また、アンケート調査の結果、幼児の約3割が「困難を有する」と回答した項目が2項目あった。〈その2〉で、近見視力との関連をみた。

【結論】5歳児にスクリーニングとしての視力検査を行うことは可能であり、有用である。

MEMO

03 幼児の近見視力について(その2) —近見視力と視行動—

かわばたひでひと 川端秀仁¹⁾、高橋ひとみ²⁾、衛藤 隆³⁾

¹⁾ かわばた眼科院長, ²⁾ 桃山学院大学, ³⁾ 東京大学大学院教育学研究科

【目的】幼児は、日常生活では遠見視力よりも近見視力を必要としていると考えられるがどのような影響があるか検討した研究は少ない。今回我々は幼稚園児を対象に近見視力不良が子どもの日常生活へ及ぼす具体的影響について検討した。

【方法】「近見視力検査」と「視行動に関するアンケート調査」を実施した(詳細は〈その1〉参照)。統計処理はSPSS(Ver13)により χ^2 検定を行った。

【結果と考察】近見視力が両眼とも「1.0以上」と両眼とも「1.0未満」の間で、アンケート項目の結果に違いがあるかをみた。その結果、「読んだり書いたりする時、本やノートに目を近づける」「集中して『本読み』『文字を書く』などの作業ができない」「まばたきや目をこすったり、目を細めることがよくある」「形を写すのが苦手である」の4項目において、有意の差が認められた($P < 0.05$)。遠見視力検査結果と視行動の関連についても、同様の分析を試みたが有意な違いは認められなかった。すなわち、近見視力が両眼とも「1.0未満」は「1.0以上」よりも、視行動において困難を有していることが示唆された。子どもは成長につれてしだいに見えるようになるから、「見えた」という経験を持たない子どもは「見えなく」ても自分では訴えない。したがって、近見視力検査の実施が望まれる。

【結論】近見視力測定は簡便であるが、子どもの視機能の不調を発見するために有用である。

MEMO